



日本共産党・そねはじめレポート とうきょう民報おりこみ版

2011年 12月21日発行 第 26 号

そねはじめ事務所
114-0032
北区中十条2-11-6
Tel: 3907-1135
Fax: 3906-3225

除染せず柵で囲ったのは子どもの安全より「経過観察(実験)のため」 都立の公園・学校・団地など放射線測定と対策を

12月19、都の環境局が都立公園で最高毎時 $7.06 \mu\text{Sv}$ の放射線を測定しながら除染を行わない問題などについて、共産党都議団の主催で説明会が行われ、そねはじめ前都議も参加しました。

●「国の基準だから」の一点ばり

都の説明では、局所的な放射線の国基準は高さ1mで $1 \mu\text{Sv}$ なので、今回は中川公園の地表で高濃度が出たが、「1mでは基準以下なので除染しない」の一点ばりでした。

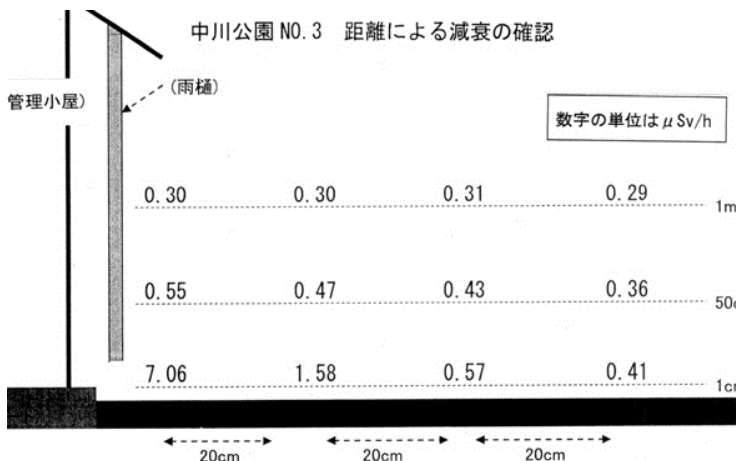
「父母の方は空中放射線より子どもの体や服に地面から放射性微粒子が付着するのを心配している。なぜその危険を無視するのか」とそね前都議が質問。担当者は返答できませんでした。

●なぜ除染しないかは「放射能を経過観察する」実験が目的

また、都が高濃度地点の周辺をフェンスで囲んだことについて「子どもの安全のためか」と聞くと

「国の研究で放射線が2年で4割減るとの予測があり、経過観察で確認するため」と担当者が説明。

そね前都議は「囲っただけで除染しないのは子どもの健康より放射能実験を優先するというモルモット扱いではないか」と厳しく批判。なにより子どもや都民の健康を第一にすべきで、都立の全公園、学校・都営住宅などをくまなく測定し、少なくとも測定場所の地元区の基準を超えたら除染すべきと要求しました。



都が学校給食の放射線測定器を購入へ..250万円の測定器5台、 23区と連携し、今後実施内容を具体化

●半数の区がすでに測定開始へ

北区議会の第4回定例会の代表質問で、共産党の福島区議が強く求めた「給食の放射線測定」について、12月2日の防災対策委員会の陳情審議の中で、北区が都と連携して、給食の放射線測定を実施する方向性を明らかにしました。続く12月9日には、東京都が国に対し、すでに放射線測定器購入事業を申請したことが確認されました。

区議会には、「北区子どもを放射線から守る会」などによる、給食測定を求める陳情が3本、5300筆を超える署名とともに提出されていました。

共産党の山崎たい子委員は、「親たちの不安に応じて、一日も早く給食の放射線測定を実施し、北区としてもリスク管理に踏み出すよう強く求める」と採択を主張しました。

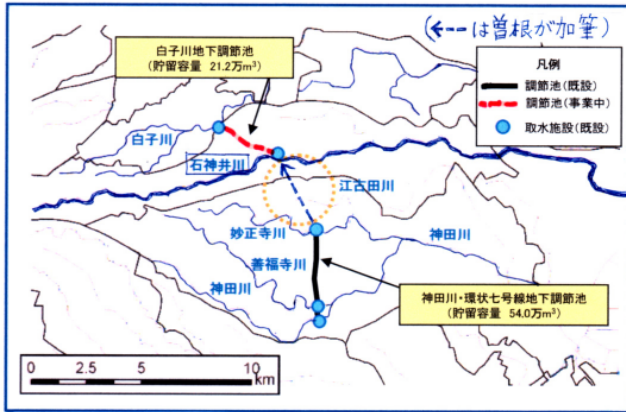
●それでも5300人の陳情に“採択を拒否”

しかし、自民・公明などにより給食測定の要望は「継続審議」。区が都と連携して測定の方角を示唆しているのに、与党が採択させまいとするのは、有権者や区政より、東京電力や原発推進勢力におもねっているとしか思えない態度ではないでしょうか。

都が石神井川など 80 ミリ豪雨対策に水準引上げ

堀船水害再発防止に「環 7 地下貯水池」連結へ

都の学識経験者で構成する「東京都の中小河川における今後の整備のあり方検討委員会」は、12月に「中間まとめ」を出しましたが、石神井川など集中豪雨による都市型水害が多発している河川の整備水準を1時間50ミリの豪雨から、「区部では時間65～80ミリ、多摩で時間60～70ミリ」の範囲で引上げることが望ましいとする答申が出されました。



●場所によっては百ミリ豪雨にも対応

来年夏までに最終報告をまとめる予定ですが、石神井川流域は最近最も頻繁に都市型水害が発生しているだけに、最大の基準引上げが必要と考えられます。

都内で頻繁に時間100ミリを超える局地的なゲリラ豪雨が多発しており、各地の浸水被害の状況を踏まえた対応ができるようにすべきとの指摘もされました。

●貯水池連結を“先行検討”

また、最終報告に向けて、先行的な検討が必要な内容として、神田川・環7地下貯水池と白子川地下調節池との連結は、練馬の局所的集中豪雨に対し非常に高い効果が期待できるとして検討を先行して進めていくべきと提言しています。

●そねはじめの提案が先行実現の可能性

そねはじめ前都議は、山崎たい子区議とともに、すでに昨年11月、白子川地下調節池から目白通り地下を通り石神井川までのシールド工事を視察しました。

5年かかるという工事を急ぐとともに、中野区野方地下まで達した環7地下貯水池をあと3km伸ばし、白子川からのシールドと連結する事業を並行して進め、5年後までに巨大な連結を完成させれば、練馬で時間100ミリ以上の豪雨があっても、下流の北区堀船に流れてくる濁流を3分の1から半分程度地下貯水池に逃がすことができると提案しています。



そねはじめ交友録<その二十> 北大理学祭を救ってくれた 物理教授・田中一さん

北大に入学して3年目、理学部の自治会に参加し、6月北大祭(大学祭)の「理学祭」実行委員長になりました。何でも首を突っ込むわりにまとめる力のない私は、理学部らしい企画アイデアもなく、沖縄返還など政治企画も嫌いで、映画会や模擬店以外の本部企画で悩んだ末、最近宇宙物理の本を著したと聞いて、田中一(はじめ)教授に、講演を頼みに行きました。

表の芝生の広場に建てた小さな舞台でのつじ説法という最悪の条件にかかわらず、にっこり笑って引き受けていただいたの

にはびっくりしましたが、本番になって田中先生の秘策が判明しました。先生は、大学祭で道行く人に向かって「皆さんは宇宙生物の存在を肯定するか否定するか」と問いを投げかけ、宇宙物理の最高権威とは思えない平易な語り口で、科学的に宇宙生物の存在を論証し、さらに超遠天体から光の速度を超えて移動するエネルギー(40年後の最近発見されたばかり!)についても論じました。気が付くと舞台の前の芝生は100人を越す観客で埋まっていました。超一流学者の論じる学問の面白さは、時と所と相手を選ばないことを、まざまざと見せつけられ、同じ「はじめ」の名を持つのが恥ずかしくなりました。

2004年、久しぶりに訪ねた北大理学部横のローン(芝生広場)。ここに舞台を組んで田中教授に講演してもらった懐かしい場所です。

